

矢作川中流域の木材流送を物語る — 豊田市の百々貯木場 —

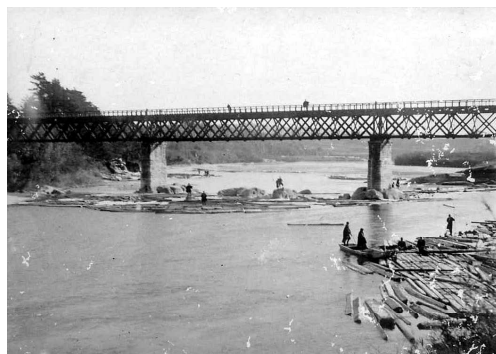
■河川中流域の珍しい水中貯木場

矢作川は、昭和初期までは木材流送の主要な河川であった。その姿は今では古写真に見られるだけであるが、豊田市の矢作川には当時としても珍しい水中貯木場があった。当地の材木商・今井善六が1918(大正7)年建設したもので、この頃には年間1万本を超える木材を下流に



百々貯木場での貯木風景
(1919(大正8)年完成時、「今井家所蔵」より)

流し販売していた。しかし洪水時には流失する木材が数千本に達することもあり、百々貯木場の建設はその対策が主要な目的であった。一方製材業も行っていた今井家では、ここで陸揚げして木材加工するためにも好都合であった。



矢作川の木材流送
(1917(大正6)年、平戸橋付近、「今井家所蔵」より)

■貯木場を人造石工法で構築…しかし短い一生

百々貯木場の面積は約6,300㎡(うち貯水池面積が5,000㎡)と必ずしも大きくはないが、その造りが独特であった。矢作川沿い及び矢作川に流れ込む小河川の岩本川沿いに巨大な堤防を造り、貯木池を掘削して水中貯木場とし、その堤防法面(壁面)及び掘削地の法面や、木材の通行箇所となる樋門などを人造石工法で建設した。大正中頃にはコンクリート工法が普及し始める時期でもあり、規模の大きな人造石構造物の最終期の工事箇所ともなった。

しかし水中貯木場としての使用年数は短かった。貯木場下流の矢作川に1929(昭和4)年に越戸発電所の堰堤(ダム)が完成し、木材流送が困難となりわずか10年余りの短い一生であった。

■大正期～昭和初期の木材流送を物語る風景

百々貯木場の存在意義は、林業技術史の観点からは、筏に組んで木材を流す結節点を立証する証拠であること、水運の観点からは河川が運輸、交通に果たした役割を立証するものであること、土木技術史の観点からはダム建設によって消滅せざるを得ない時代のへの転換点に位置していたことにある。中でも河川中流域に存在する水中貯木場としては、全国的にも唯一のものであることが近年の調査で判明し、木材流送を物語る希少な遺構となっている。また人造石工法最終期の遺構としての意義も有している。



百々貯木場の樋門 (2023 年筆者撮影)

百々貯木場は豊田市の指定文化財となった当初に「カキツバタ園」として整備されたが、その名残となる歩道が池内6本の人造石突堤を結ぶ形で配置されている。木材の搬入搬出口となった人造石樋門も建設当時の姿で残っている。百々貯木場は今も、矢作川中流域の街の風景に溶け込む形で雄大な姿を見せている。



百々貯木場全景(堤防法面、樋門、池内の突堤は人造石で建設)
(右側の堤は矢作川沿い、2023 年筆者撮影)

として整備されたが、その名残となる歩道が池内6本の人造石突堤を結ぶ形で配置されている。木材の搬入搬出口となった人造石樋門も建設当時の姿で残っている。百々貯木場は今も、矢作川中流域の街の風景に溶け込む形で雄大な姿を見せている。

(天野武弘)